

徒然草

空腹な子供たちの社会学

浅沼 信爾
一橋大学客員教授

今年は第二次世界大戦の終焉から 75 年目に当たる。終戦直後の記憶は何と言っても食糧難と空腹だが、それに直面した子供たちがどんな行動をとったか、それを見た大人たちはどんな反応をしたか、わたくし自身の経験を想いだした。

わたくしは 1938 年に今日の三重県伊勢市に生まれた。伊勢神宮は天皇家の氏神だったから伊勢市は「神都」と呼ばれ、神都防衛のために郊外に小さな飛行場があった。それが仇になって、伊勢市は日本人の戦意喪失を目的とした、当時の人たちが大空襲と呼んでいた B29 爆撃機の編隊によって焼失された。1945 年 7 月末のことだ。わたくしは、市の近くを流れる宮川の堤防に家族と座り込んで、三日三晩市街地が焼けるのを見ていた。

しかし本当の苦難が押し寄せたのは戦後だ。それまでは曲がりなりにも食糧の配給制度があったから、母親の着物や装身具を売って食料と交換すれば何とかしのげたが、その配給制度が崩壊して最低必要限の食糧さえ手に入らなくなった町の住民はつてを求めて近隣の農村に疎開した。戦時中に父親を亡くしていたわが家は、幸い母親が小学校の先生をしていたので、近くの村に疎開した。そして終戦の年にわたくしはその村の生徒数 200 人足らずの小学校の一年生になった。

一年生全部で 30 人をちょっと超えるくらいの生徒のうち 6, 7 人の「疎開者」がいたのだろうか。農村の子供たちと彼らの違いは、疎開者家庭の子供たちのほとんどが昼弁当をもって来ないことだ。彼らは昼休みになると外に出て水道の蛇口から水を飲み、元気を装って運動場で遊ぶ。自然と農村の子供たちとは一線を画したグループが構成される。そのうちに、農村の子供たちの昼弁当が朝の時間中に盗まれるようになった。そして、誰が盗んだ、盗まないの喧嘩が始まり、二つのグループは敵対するようになる。これを心配した若い女先生は、農家出身なので毎日五つ六つの弁当を作ってきて疎開者グループの子供たちに食べさせようとした。まだ 20 歳を超えたばかりの若い優しい先生で、半分泣きながら「盗むな、これを食べなさい」と言っていた。

驚くべきは、疎開者グループの誰も先生の弁当に手を付けようとしなかったことだ。子供ながらのプライドなのだろうか。村の人間に対する反感なのだろうか。そして、昼弁当泥棒は断続的に続いていた。ここにいたって、校長先生が一大決心をする。小学校の

午後の授業をすべて取りやめ、その代わり生徒と先生全員が農家から借りた2段ばかりの田圃と運動場を潰して作った芋畑で農作業をすることにしたのだ。そして、農家からは収穫した後で返済する約束で米とサツマイモを借りて、小学校独自の昼食を給食することにしたのだ。多分校長先生は、先生方と父兄の一部と相談しただけで郡や市の役所の許可なしにすべて独断でこの給食プログラムを実行に移したらしい。秋の米の収穫が終わった後で、小さい茶封筒に半合位の米を家族へのお土産だよと言ってもらった時の嬉しさは今でも覚えている。

おかげで昼弁当泥棒をめぐる疎開組と農村組の反目はおさまった。そして子供たちも進化を始めた。村の近くには神都を守る目的で作られた飛行場があったが、戦争が終わったあとはこの進駐軍の兵士僅か6、7人でこの飛行場を管理していた。滑走路はコンクリートをはぎ取った後は、近くの畑を持たない(すなわち疎開者)家族に無償で貸し出され、われわれはそこにサツマイモを植えていた。だからこの元飛行場で何が起きているか、何があるのかはよく観察していたし、時には子供たちはグループを組んで飛行場に偵察に出ていた。われわれがまず注目したのは、戦闘機の石油タンクを銃撃から守る目的でタンクに張り付けられていたゴム板だ。それから戦闘機の車輪とジュラルミンで出来た石油タンクだ。

われわれグループのリーダーたちは小学校の高学年の生徒で、わたくしは低学年でせいぜい見張り役しかもらえなかったが、それでも積んであるゴム板を運び、車輪を運び、タンクを持ち出し、価値ありそうなものは何でも村まで運び込んだ。そこにはこれらの略奪品を買い取る大人のブローカーが来るようになって、この子供のグループはお小遣いが手に入るようになった。わたくしは今でもいわゆるゴム草履は、最初はわれわれが運んで来た材料から作られたのだと信じている。村の生活もちょっと変わった。リアカーの車輪で飛行機の車輪を付けたものが現れ、牛の飼料桶がジュラルミン製になった。これもわれわれの功績だった。一番良かったのは誰も捕まらなかったことだ。ただ、不発の機銃弾からペンダントを造ろうとした子供が、手の指を二本失った。

これが、わたくし自身が空腹な子供だったときの思い出だが、後に仕事でアジア諸国を歩き回る機会があった時に現地の知人に頼んでスラム街に連れて行ってもらったことが何度かある。スラム観光と呼ぶといかにも悪趣味だが、自分が何らかの形で関わっている国のスラムや貧村の生活を知りたかったからだ。マニラの北にあるトンド、ジャカルタの目抜き通りタムリンの西に広がるカンブン、バンコックの繁華街スクンビットの南、チャオプラヤ川に面したクロントゥーイなどには何度か足を運んだ。そこには空腹の子供たちがいたが、話を聞くと彼らがしていることは小さな盗みやカップライと廃品あさりやごみ拾い、機会があれば十字路に渋滞した乗用車の窓洗い等の小遣い稼ぎ、す

なわち盗るか稼ぐかの二本立てで、何とか空腹を満たす努力をすることだった。子供たちの周りには、わたくしの女先生や校長先生のような善意に満ちた大人たちがいて、同時に子供たちの小遣い稼ぎを自分の商売に利用しようとする廃品ブローカーのような大人たちがいた。わたくしが戦後の空腹の時代にした経験はなんら特別ではなく、どこの国でも空腹な子供たちは同じようなことをして空腹をしのぐ術を考え出し、周りの大人たちは彼らを助ける事業を始めたり、自分の儲けのために搾取しようとする。空腹な子供の社会学はたぶん世界共通だなというのがわたくしのスラムを歩き回って得た感想だった。

しかし、「何とかしのぐ」と「根本的に解決する」のは大きく違う。周りの経済状況が変わらないで、子供たちと周りの大人たちの努力で空腹な子供たちを無くすことなどできない。実はわたくし自身の経験でより強い印象を残したのは 1945 年の終戦から 1950 年代初めにかけて起こったことだ。空腹を常時意識するような生活は二、三年も続いただろうか。そのうちにいつか空腹の辛さを忘れるようになったし、食べ物を始め、着物、履物、本、勉強道具等々が身の周りに現れて、年を経るごとに生活は豊かになっていった。我が家が世間と比べて相対的に豊かになったわけではないから、すべて日本経済の復興と経済発展のおかげだ。経済成長が貧困をなくしたのだ。それが空腹な子供たちの根本的な解決策だったのだ。そしてまた経済成長による貧困削減は、日本に特有の現象ではなかった。MDGs の基準年である 1990 年に世界の途上国全体で 40%以上だった絶対的な貧困人口は、2020 年には 10%にまで低下したが、それに最も貢献したのは 1990 年代始めから 2007/08 年のリーマン危機と世界大不況まで「ゴールデン・イヤーズ（黄金の歳月）」と呼ばれるほど順調だった途上国の経済成長だった。¹

余談になるが、貧困と経済成長はずいぶんと長い間議論されてきた。その議論でしばしば経済成長の「トリクルダウン（滴り落ち）効果（trickle-down effect）」という言葉が使われる。わたくしが知る限りこの言葉を最初に使ったのはアルバート・ハーシュマンという開発経済学の先達で、彼は『経済発展の戦略』という著書の中で、ある国あるいは地域で始まった経済成長が他の国々あるいは地域に伝播する「成長伝播」の効果をこのように呼んだ。² 水がしたたり落ちるように経済成長が伝わってゆく様をこのように呼ぶのは、「金持ちのテーブルから落ちてくるパン屑」のような俗なだけでなく感情的な反発を呼ぶような言葉よりはよほど適切だと思われた。残念なのは 1980 年代にレ

¹ もちろんこの貧困人口比率は現在進行中のコロナウイルス禍を原因として 1-2 %上昇する可能性がある。

² Albert O. Hirschman, *The Strategy of Economic Development*, 1958, Yale University Press. Chapter 10, “Interregional and International Transmission of Economic Growth”. (アルバート・O・ハーシュマン著、小島清監修、麻田四郎訳『経済発展の戦略』、1982年、巖松堂出版)

ーガノミックスと呼ばれるようになる富裕者層の減税政策を正当化するために、それを支持する新自由主義的エコノミストがトリクルダウン効果という言葉を使ったことだった。それ以来、経済成長が貧困削減に及ぼす影響を議論すると必ずトリクルダウンという言葉は手垢に塗れた政策を代表する言葉として侮蔑的に使われ、トリクルダウン自体が真面目に議論されなくなってしまった。

誰だったかは失念したが、トリクルダウンの代わりに「慈雨効果」という言葉を使った人がある。山があって、川があって、平野があって、そこに畑がある。恵みの雨が山に降り、川に注ぎ、畑を潤して、作物が実る。もちろん山の森林が破壊されていれば、山に降る雨は洪水になり、平野の田畑に害を及ぼす。これからは、経済成長と貧困の関係を議論するときにはトリクルダウンという言葉は忌避して、「慈雨効果」を使うことにしてはどうだろう。

わたくしの戦後の空腹の経験のなかで、戦後日本経済の回復と発展がもたらした「慈雨効果」はとりわけ印象が深い。わたくしは生涯を通じて途上国の経済発展やそのための開発金融の仕事をしてきたが、その動機の一つに子供の頃の空腹の記憶とその後に訪れた「慈雨」があるのは間違いない。